最弱ジョブ【弓使い（アーチャー）】の俺、うっかり迷惑Sランクパーティーをボコしてしまう 3

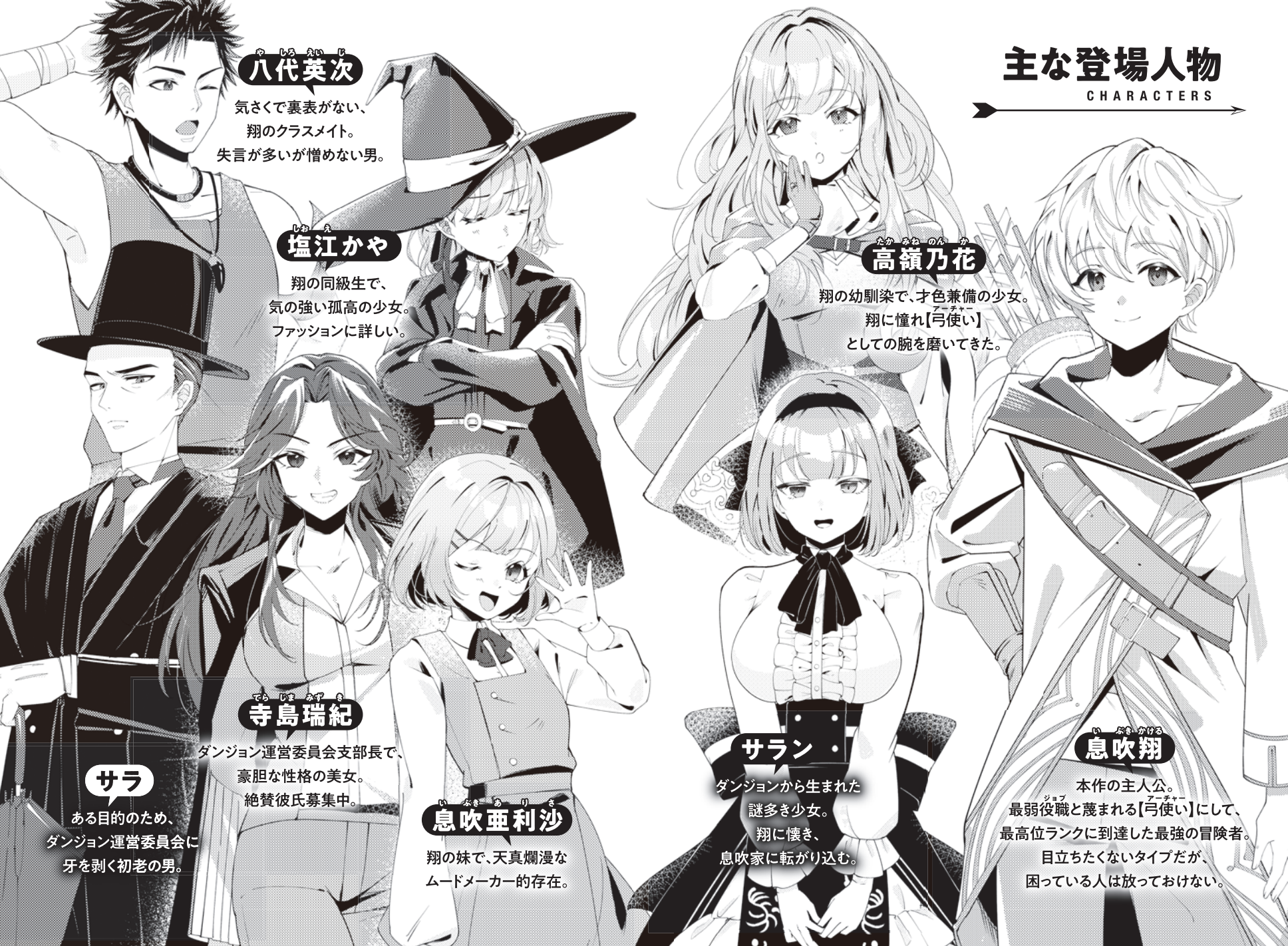
果一
hatehajime
Illust. みかみマイケル

CONTENTS

プロローグ　浮気現場を見られた夫はこんな気分らしい……007
第一章　息吹家の新しい家族……015
第二章　サラ……065
第三章　『バッドエンドは許さない』……125
第四章　紡ぐ希望……201
エピローグ　約束……275

Weakest Job
Archer

主な登場人物
CHARACTERS



八代英次（やしろえいじ）
気さくで裏表がない、
翔のクラスメイト。
失言が多いが憎めない男。

塩江かや（しおえ）
翔の同級生で、
気の強い孤高の少女。
ファッションに詳しい。

高嶺乃花（たかみねのんか）
翔の幼馴染で、才色兼備の少女。
翔に憧れ【弓使い（アーチャー）】
としての腕を磨いてきた。

寺島瑞紀（てらじまみずき）
ダンジョン運営委員会支部長で、
豪胆な性格の美女。
絶賛彼氏募集中。

サラ
ある目的のため、
ダンジョン運営委員会に
牙を剥く初老の男。

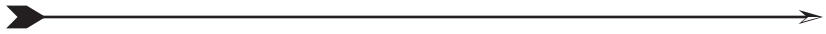
息吹亜利沙（いぶきありさ）
翔の妹で、天真爛漫な
ムードメーカー的存在。

サラン
ダンジョンから生まれた
謎多き少女。
翔に懐き、
息吹家に転がり込む。

息吹翔（いぶきかける）
本作の主人公。
最弱役職（ジョブ）と蔑まれる【弓使い（アーチャー）】にして、
最高位ランクに到達した最強の冒険者。
目立ちたくないタイプだが、
困っている人は放っておけない。

プロローグ

浮気現場を見られた夫は
こんな気分らしい



Weakest Job
Archer

「はぁ～、やはりベッドは最高です。人を強制的に堕落へと誘う特級呪物ですよ～」
褒めているのか貶しているのかわからないことを言いながら、その少女――の形をした何かは、ゴロゴロと俺――息吹翔のベッドの上で転げ回る。
少女の形をした何か。そう表現したのは、肩で切りそろえた薄青色の髪に、血のように赤い色の瞳を持つその少女が、人間離れした美貌を持っていることにも起因するが――そんな抽象的なことよりもっとわかりやすいのが。
「すぅ～はぁ～、うん、このシーツもいいですね。ぐへへ、ご主人様の匂いがして実にいいです。あはっ、やべ、勃ちそう」
「ナチュラルにセクハラ発言するのやめて。あと、シーツ持ったまま空中飛び回るのも。ほこりが舞う」
俺は眉間を押さえつつ、俺の部屋の中をゆっくり飛び出したその少女に注意した。
そう、飛んでいるのだ。異国のお姫様のドレスと天女の羽衣を合わせたような、薄青のドレスを着たこの少女は。あらゆる物理法則から解放されたダンジョンの中でもないというのに。
――ダンジョン。
それは西暦２０００年という節目に生まれた、未知の地下迷宮だ。
ファンタジー世界のようなモンスターが蔓延るダンジョンに、人々は富と名声を求めて日夜潜っている。

俺もそんなダンジョンで、ＳＳランクの冒険者の一人として、つつがない日々を送っていたのだが――先日、〝センター・ダンジョン〟で木山豪気たち迷惑Ｓランクパーティーをボコしてしまい、その結果大ニュースになってしまった。
事件はそれにとどまらず、俺が通っているアマリリス上等学園にあるダンジョンで異変が起きて巻き込まれたこともあった。
そして極めつきは、先日アマリリス上等学園で起きた、学園のダンジョン化現象だ。
その中核を担っていたと思しき凶悪モンスター〝ヴェノム・キング・デーモン〟を討伐した――までではよかったものの、問題はその後に起きた。
討伐した〝ヴェノム・キング・デーモン〟の核から、この幽霊みたいな女の子が生まれてきた。
おまけに、俺のことを「ご主人様」と呼び慕って、カルガモのヒナみたいに付いてくる始末。
もう本当に、どうしたらいいのかわからない。
わからないまま事態を引っ張って、気づけばこの子と出会って一週間近く経っている。つい最近の塩江さんのバイト先訪問で姿を解禁してから、やりたい放題もいいところだ。
「君はさ、いったい――」
「ぶっぶー、失格です～」
話しかけようとした俺を、しかしその少女はふわふわと飛びながら遮ってくる。
「は、はい？　失格ってなにが――」
「その呼び方ですよ。『君』とか『お前』とか……そんな呼び方されたら悲しくなっちゃいます。

女の子は繊細なんですよ？　もっと、絹を扱うように優しく、慈愛を込めて名前で呼んでくれないと……ボク、心が壊れちゃいます」

コイツの場合そこまで繊細でもないと思う。だが、まあ。言っていることは憎たらしいほどに正論だ。

「わかったよ。これからは名前で呼ぶから、名前教えて」

「ありませんよ？」

「……え？」

あっけらかんと言った少女に、俺は思わず目を丸くする。少女は、抱きしめたシーツを弄びながら。

「ですから、ありません。ボクは生まれたばかりなので。ぜひ……我が愛しのご主人様に付けていただこうかと」

「え、俺が付けるの」

だが、考えてみれば彼女に名前がないのは当たり前だ。そもそも、彼女は名前どころか自分が何者であるかすらよくわかっていないみたいだし。

名前がないのならば、とりあえず与える、というのは当然の流れなのだが――一つ問題がある。

「俺、ネーミングセンスとかないけど」

「いいんです。ボクは、親愛なるご主人様から与えられたものならば、たとえそれがどんなものであっても、喜んで受け入れますよ？　あれ、これが愛というものですかね？」

「そ、そうか。じゃあ……そうだな。〝ヴェノム・キング・デーモン〟から生まれたし、昔話に倣って〝ヴェノム〟から生まれた『ヴェノ太郎』とか？」

「たとえどれほど好ましい相手からの贈り物でも、受け取れないことってありますよね？」

おい。

どんなものでも受け入れるって言ったのはお前の方だろ。……まあ、この程度の名前しか出せないのに、責めることなどできないが。

しかし、そうなると本格的に名付けに困る。義妹の亜利沙に相談したくとも、この少女のことはまだ誰にもバラしていない。というか、バラしたら絶対パニックになるからバラすにバラせないのだ。

「いっそのことマイハニーとかでもいいんですよ？　ご主人様ぁ」

「却下で」

「あはっ、つれないですねぇ。でも、そんなところも素敵だと思います」

長いまつ毛に彩られた深紅の瞳を細め、ふわふわと浮いたまますり寄ってくる少女。そのまま、自身の細い腕を俺の首元に絡めてくる。

「オイこら、抱き着くな。こんなとこ、亜利沙に見られでもしたら――」

「だからこそ、じゃないですかぁ。浮気をするコツは、どれほどスリルを楽しめるかですよ？　ほら、人って強欲なくせに飽き性ですから。愛はより多く、そして緩急を付けなければ、いずれ捨てしまいます」

「なにを言っているのか本当に理解できないけど、その考え方直した方がいいよ？」
ジト目で苦言を呈する俺に、目の前の少女は背筋をくすぐるように嫣然と笑みを浮かべて、首に巻き付けた腕へさらに力を込める。鼻先と鼻先が触れ合いそうな距離にまで、少女の小さな顔が迫り――次の瞬間、バンッ！　と、音がして部屋の扉が開いた。
「お兄ちゃん！　今日の夕ご飯、豚の生姜焼きでいい――」
止める暇もなかった。
満面の笑みで飛び込んできた亜利沙が、扉を開いた格好のまま固まっていた。
「あ、その。亜利沙、これは……違うんだ」
「……」
「信じられないかもしれないけど。コイツが、ずっと俺に付きまとってきて……そう、これは不可抗力ってやつなんだ！」
空中浮遊系少女に抱き着かれたまま、しどろもどろに告げる俺。ちくしょう。事実を告げているだけなのに、浮気現場を見られて妻に言い訳をしているダメ男にしか見えない。
「……うん、そうだね。わかってる。私のお兄ちゃんは、知らない女の人を家に連れ込んだりしないって」
「！　亜利沙！　わかってくれたか！」
「うん、もちろん。私は、何があってもお兄ちゃんを信じるよ」
慈愛に満ちた表情で俺を信じてくれる亜利沙を前に、胸の奥が熱くなる。やはり、持つべきものは妹だ。
「あ、そうだ。今日の夕ご飯は豚の生姜焼きじゃなくて、ゴゴイチの十辛カレーに亜利沙ちゃん謹製ハバネロスパイスをかけて提供するから、よろしくね？」
「ああ！　……、え？」
引きつった顔のまま固まる俺の前でくるりと踵を返すと、何事もなかったかのように亜利沙は部屋を出ていく。
「って、待って！　ぜんぜん信じてないじゃん！　ほんとに誤解だから見捨てないでくれ、亜利沙ぁあああああああ！」
「あはっ。ご主人様、端からは浮気して妻に見捨てられたクズ夫にしか見えないですね、爆笑です」
「お前は他人事みたいに言うなぁあああああああっ！」
――俺の絶叫が、狭い自室に木霊するのだった。

第一章

息吹家の新しい家族



Weakest Job
Archer

人生には、決して避けて通れない山場というものが存在する。
例えば、受験。例えば、就活。
そのどれもが、選択一つで大きく人生を変えていく。つまり、何が言いたいかと言うと――今このときが、俺の山場ということだ。
「――てなわけで、コイツが俺のところに居座り続けてるんだよ」
所変わってリビング。ソファに座って足を組み、膝を指先でトントンと叩きながら俺を見下ろす妹に、俺はおっかなびっくり事の経緯を伝え終えた。俺よりも背が低い亜利沙に見下ろされている理由は単純。俺が今、カーペットの上で正座しているからである。
ちなみに、すべての元凶である浮遊少女は、我関せずとばかりに、台所の棚に置いてあったポテトチップスを勝手に開けて摘まんでいる。マジで殴りたい。本当に殴ったら浮気にＤＶ属性まで付与されて、いよいよ救えないクズになりそうだからやらないけど。
「なるほどね。まあ、一応経緯はわかったよ……」
一通り話を聞き終えた亜利沙は、頭を抱えて「はぁ～」と大きくため息をついた。
「モンスターから生まれた謎の女の子に好かれるなんて。お兄ちゃんはほんと、トラブルに巻き込まれる天才だよね」
それを言われたらぐうの音も出ない。でも、トラブルの方が向こうからやってくるのだから仕方ないじゃないか。

だが――事情はどうあれ、妹に迷惑をかけたのも事実だ。
「ごめん、亜利沙」
「ほんとだよ。最近物価も上がってるのに、食費のやり繰りがまた大変になるよ」
「え？」
思わぬ亜利沙の言葉に、俺は目を丸くする。
それはまるで、自分もこの問題を一緒に背負うというような言い方で――
「ひょっとして、私があの子を追い出すとでも思った？」
「いや、そこまでは思ってないけど……これは、俺が解決すべき問題だから」
「はぁ～、お兄ちゃんって、たまにバカだよね」
至極当然のことを答えたつもりなのに、なぜか呆れ顔をされた。
亜利沙はやれやれと肩をすくめながら。
「私はお兄ちゃんの妹だよ？　妹は、兄を支えるものなの。だから、お兄ちゃんだけで抱え込む問題じゃない」
「亜利沙……」
それが当然と言わんばかりに、あっけらかんと答える妹に、胸が熱くなるのを感じる。
「（ま……そういう無駄にお人好しなところに惚れたんだし、惚れた方が負けだよね）」
「？　何か言ったか」
「ううん、なんにも？」

一瞬、微かに湿り気を帯びた表情をしていたが、すぐにいつもの天真爛漫な表情に戻ったので、気のせいだろう。

「ふぁんふぉははひふぉひふぇるんふぇふ？」

「なんの話をしてるんです？　って、あなたを息吹家に迎え入れますよって話をしてました」

ポテトチップスを頬張りながらふよふよと近寄ってきた少女に、亜利沙はそう答える。

「！　ふぉんふぉへふは!?」

「はい、本当です」

目を輝かせる浮遊＋居候属性が付与された少女に、微笑み返す亜利沙。

てか、ポテトチップス食いながらしゃべるな。そして、何を言ってるか聞き取れている妹が地味にすごい。

「ごくん。いや～ありがとうございます！　これで正式にご主人様と一つ屋根の下で暮らせます。これからは合法的にあんなことやこんなことを――」

「してきたら家から摘まみ出すからね」

「ぶー、つれないですねご主人様は」

俺の言葉に唇を尖らせて抗議してくるが、なんとでも言うがいい。

「ところで、あなたのお名前は？」

「それが、ボクにはまだ名前がないんですよ。そのせいで、さっきは危うくご主人様に『ヴェノ太郎』とか名付けられそうになりまして」

「……、……お兄ちゃん？」

ジト目で見てくる亜利沙に耐えかね、俺はそっぽを向く。「女の子になんて名前付けてるの？」という視線が痛い。

「けど、名前がないのは不便だよね。そうだな……」

亜利沙は、ふわふわと宙に浮いている少女を頭のてっぺんからつま先まで見て――

「――サランちゃん、とかどう？」

そう、一瞬で女の子らしい名前を付けた。

「！　サラン……サランですか」

「髪の毛サラサラだし、東洋人って感じの見た目とも違うから、いいかなって思ったんだけど……嫌なら別に」

「いいです！　素敵です！　流石はボクが認めたご主人様の妹さんですね、素晴らしいネーミングセンスです」

パッと目を輝かせた浮遊少女――改めサランが、空中で踊るように回る。

「その理論だと俺のネーミングセンスも認めてることになるけど？」

「流石はネーミングセンス以外認めたご主人様の妹さんですね！」

「さらっと訂正された」

まあ、事実だから仕方ないけど。料理の腕前に始まり、社交性もネーミングセンスも、芸術的な感性すら俺は妹に遠く及ばない。そろそろ、兄としての威厳が底をつきそうだ。

「おほん。というわけで、不肖サラン。これから息吹家にお世話になります。不束者ではありませんが、どうぞ末永く、結婚から墓場までよろしくお願いいたします」

床に降りてきたサランが、メイドのように綺麗な礼をする。

「見た目は腰が低いのに言ってること図々しすぎるだろ」

「あは、あははは……」

ため息をつく俺の横で、亜利沙が苦笑いをする。

慇懃無礼とはこのことか。だが、まあ。退屈しない日々が始まりそうだ。

息吹家に新たにやってきた仲間――もとい居候を見て、俺はそう思った。

◆◆◆

「おぉおおお！　これがお風呂というヤツですか」

「こら、はしゃがないの」

湯気の立ち上る浴室で子供みたくはしゃいでいるサランに、亜利沙はそう注意する。

夕食を終え、今は二人でお風呂タイムと洒落込んでいる。生まれたばかりで人の家も初めてである彼女は、お風呂の入り方も知らないらしい。

もし温度調節をミスったままカランを捻って熱湯を浴びでもしたら大変だ。そんなわけで、決して広くない浴室に少女二人で入っているわけである。

「どうせなら、ご主人様も一緒に入ればいいのに」

「！　い、いいわけないでしょ！　お兄ちゃんは男だよ!?」

ボディーソープの入ったボトルをあちこちから眺めながら、さらっととんでもないことを口走ったサランに、亜利沙は思わずツッコミを入れる。

「そんなものですかね？　人外少女と入浴するよりよほど自然では？」

「そ、そんなこと……あ、あれ？　でも、そう言われればそんな気も」

確かに言われてみれば、兄は人間だ。サランという不思議少女と肌を晒し合うよりも、よほど健全で普通の行いなんじゃないだろうか？

「そうですそうです。だから今からご主人様を呼びにいきましょう。お～い、ご主人様ぁ～」

サランがくるりと身を翻し、湯気で満ちた浴室の扉を開けて出ていこうとする。……任意で消せるという服をすべて消した、すっぽんぽんの状態で。

「っ！　て、ダメに決まってるでしょぉおおおおおお！」

裸のままリビングへ突撃しようとしたサランを見て我に返った亜利沙が、全力で引き留めるのだった。

「ふぃいい～、さすがは亜利沙さんです。背中を流すのがお上手」

「えへへ、そうかな」

「はい。天にも昇る気持ちですよ～」

そう言われたら、サランの背中を洗っている亜利沙としても悪い気はしない。

（それにしても……）

タオルを優しく背中にあてがいながら、亜利沙は改めてサランを観察する。

まさしく人外の美少女だ。病的なまでに白い肌にはシミ一つなく、湯気でしっとりと濡れた透明感のある青い髪はサラサラで、息をするたびに細く艶めかしいうなじが髪の隙間から見え隠れする。

小柄なのに、その滑らかな曲線を描く肢体は絵画からそのまま出てきたかのように美しい黄金比を備えており、同じ女として思わず嫉妬してしまうくらいスタイルがいい。

「？　どうしました？　ボクの体になにか変なところでも？」

鏡越しに視線に気づいたサランが、分厚いまつ毛に彩られたサンゴ色にも見える瞳で振り返る。

いけない。思わず手を止めていた。

「！　う、ううん。全然。むしろ綺麗で見惚れてたっていうか」

「そうですか。それは照れくさいですね。けど、ボクから言わせれば亜利沙さんの方が綺麗な体してますけどね～」

予想外の言葉に、亜利沙は目を白黒させる。

「そ、そんなこと――」

「ありますよ。ちょいと失礼」

そんなことない、と否定する暇もなかった。

気づけば、亜利沙とサランの立ち位置が逆転していた。つまり、今度はサランが亜利沙の後ろに



回ったわけで。何事かと身構える亜利沙の体へ手を回し――
「えいっ」
「ひゃんっ」
思いっきり、胸を揉みしだいていた。
「ふむふむ。小ぶりながらハリのあるいいおっぱいをしていますな～。肌が沈み込むような柔らかさがありながら、指先を押し返すしっかりとした弾力……」
「ちょっ、んっ……な、なにして」
じんわりと目を潤ませる亜利沙と対照的に、生まれたばかりの人間の好奇心を（悪い方向に）加速させるサランは瞳を輝かせる。そのまま、白く細い指先で亜利沙のお腹をなぞり上げた。
「っ！　きゃんっ！」
びくりと肩を震わせる亜利沙。
「う～む。お腹も引き締まっていて、余計な肉がない。肌もすべすべできめ細やかですなぁ。ぐへへ、あ、これ癖になりそう」
「さ、サランちゃん待って。んあっ……これ以上は、もう……！」
「まあまあ、よいではないか、よいではないか。女同士裸のお付き合いってことで……おっと、こっちはどうなってるか触診を」
「そ、そこはらめぇえええええええええええ！」

◇◇◇

「ああ、おかえり」
リビングで漫画を読んでいた俺は、風呂から上がってきた二人を見て漫画を閉じた。
「ああ、うん……お風呂上がったよ」
「？　どうしたんだ、亜利沙。なんか元気ないけど」
「ううん、大丈夫。ちょっとお嫁に行けなくされただけだから」
本当に何があった？
そんでその横にいるサランはやたらツヤツヤしてるし。
「いや～、お風呂とはかくも素晴らしいものなんですねぇ。体と一緒に心まで浄化できるとは……ぐへへ。あれはいいものだ」
何か知らんが、本当に心まで浄化されているなら、あんなゲス顔はしないと思う。
と、俺はサランの服装が風呂に入る前と変わらないことに気づいた。
「あれ、その格好……」
「ん？　ああ、これですか。服もボクの体の一部なので、自由に消すことはできるのですが、デザインまでは変えられなくて……本当は可愛らしいパジャマでご主人様を悩殺したかったのですが」
そうだったのか、服も身体の一部なのか……そうか。

と、俺の表情の変化に目敏く気づいたサランが、ニヤリと悪い笑みを浮かべる。
「あれ～？　ご主人様、今ナニを想像しました～？　無防備に浮いてる可憐な乙女のスカートの中を覗けないかソワソワしていたのに、実は全身もれなくすっぽんぽんだと知って、どんな気持ちになりました～？」
心底……うざい。
なまじずっと裸だったと知らされて思うところがないではないから、なおさらだ。仕方ないだろ、こっちはこれでも思春期の健全な男子なのだから。
「どうせ裸なんだし、今ここで見た目だけキャストオフしてもいいんですよ？」
「もししたら警察に突き出すからね」
「あはっ、ご主人様のいけず～」
からからと楽しそうに笑うサラン。
警察に突き出すことはしないにしても、だ。さすがに、（事実上）裸の女の子を侍らせてるのはまずい気がする。こう、倫理的に。
「なあ、亜利沙」
「なに？　お兄ちゃん」
「明日、空いてたりするか？」
「うん。ていうか、下等学園も休みになっちゃったし、しばらくは暇だよ」
先日の、アマリリス上等学園ダンジョン化事件。

それに伴い、生徒の安全確保と原因究明のため、しばらくの間休校になった。
ターゲットとなったのは俺や乃花が通うアマリリス上等学園だけだったが、亜利沙の通う下等学園（通称、中等部）も同じ敷地内にある。よって、下等学園も同じように休みに入っている。
「そっか、じゃあ、久々に一緒に買い物に行くか」
「！　お兄ちゃんとデート!?　やった、嬉しい！」
ぴょんと飛び跳ね、俺の腕に抱き着いてくる亜利沙。いつものスキンシップだが、今は風呂上がりで、清涼感もある甘い香りがサラサラの髪から漂ってくる。おまけに、薄手のパジャマだから女の子らしい柔らかさが伝わってきてしまって……なんというか、いたたまれない。
「うわ～、ご主人様。実の妹に飛びつかれて鼻の下を伸ばすのはどうかと思いますよ？」
「の、伸ばしてないよ」
ついでに言うと義理の妹だからセーフだよ。……、セーフだよね？
「それで、何を買いにいくの？」
俺の腕に自分の腕を絡めながら、上目遣いに聞いてくる亜利沙。
「サランの服とか、歯ブラシとかの日用品を。一緒に暮らすことになるんだし、いろいろそろえないとね」
特に服だ。実際に服を着ているように見えるということは関係ない。一度〝服を着ていない〟という事実を知ってしまった以上、健全な男の子である俺の頭の中には、どうしても素っ裸という情報がチラついてしまう。

これは由々しき問題だ。

「別にお気になさらずともいいんですよ？　ボクとしては、住まわせてくれるだけで感謝してもし足りないというか、これ以上迷惑をかけるのは忍びないので……、って、どうしましたご主人様。そんな鳩が豆鉄砲を食ったような顔をして」

「いや……君に『遠慮する』っていう概念が備わってたなんてな、と思って」

「もしかしてバカにしてます？」

つい失礼なことを口走り、サランからジト目で凄まれる。深い赤の瞳孔に吸い込まれそうだ。

けど、これまでの人を食ったような言動や、無理矢理俺に付きまとってきたという前科があるのだから、そういう認識になっても仕方ないというものだ。

「いいんだよ、気にしなくて」

俺に代わり、今度は亜利沙がサランに告げる。

「サランちゃんはもう私たちの家族なんだから……家主である叔母さんがどう答えるのかわかんないけど、ここは民主主義の国だからね。多数決の原理に基づいて叔母さんが反対しても黙らせるよ」

「……民主主義なら少数派の意見も尊重されなきゃおかしいけどな」

脳筋理論を振りまく亜利沙にツッコミを入れつつも、大方俺も亜利沙と同意見だった。

サランを受け入れるという選択をしたのだ。ならば、服や日用品を買うことは受け入れるにあたって必要なこと。

亜利沙の将来のためと、ダンジョン冒険者として稼いできたお金を使うことになるが、それでも構わない。

俺は、亜利沙の笑顔を守るためにこれまでやってきたのだ。妹もサランと過ごすことを望んでくれているなら、彼女の願いのためにも貯金を切り崩す。

「な、なんだかむずがゆいですね……ありがとうございます」

珍しくたじたじになったサランが、しどろもどろに礼を言う。

「そうだ。せっかくのお出かけだから、サランちゃんも来ない？」

「！　え、ボクも行っていいんですか？」

不意の亜利沙の提案に、目を輝かせたサランが、ふよふよと亜利沙の方へ飛んでいく。

「うん。せっかくサランちゃんの服を買うんだし、自分で見た方がいいでしょ」

「ありがとうございます！　皆さんとお出かけ、楽しみですね～」

上機嫌でクルクルと宙を回り続けるサラン。

「あ、でも人前で飛んじゃダメだからね？　もしバレたら、パニックになっちゃう。飛ぶに限らず、スキル全般は使うの禁止で……これは、約束してくれると助かる」

俺は、サランに右手を差し出す。

サランは宙から下りてきて俺の手をしっかりと握った。

「わかっておりますとも。ボクは、言われたことはちゃんと守る、素直ないい子なので」

本当に素直ないい子は、自分のことを素直とか言わないと思うが……まあそれはともかく、だ。

素っ裸なのはいろいろまずいから服を買いにいこうとしてるのに、素っ裸でそれに付いてくるって、大丈夫か？　倫理的に。

「ふへへ、明日が楽しみです。どんな服を買いましょうか。どうせなら煽情的で蠱惑的な、ご主人様を悩殺できる、あは～ん♡　でうふ～ん♡　なものがいいですねぇ」

……ぱっと見服を着ているようにしか見えないし、なにより本人が行きたがっているならそれでいいか。一部聞き流せないところはあったけども。

よだれを垂らしながら明日に思いを馳せるサランを見て、俺はそう思うのだった。

◇◇◇

翌日。

「準備はできた？　お兄ちゃん、サランちゃん」

「ああ、ばっちりだ」

「ええ、いつでも行けますよ～」

気合十分な妹の点呼に、俺たちはそろって答える。

今日はダンジョンに行くわけではないので、シャツにジーンズというラフな格好をしている。サランは当然デフォルト衣装（ソシャゲならフェス限ＳＳＲくらいの派手なものだが）に身を包んでいる。

対して亜利沙はと言うと、薄手のブラウスにフリル付きのプリーツスカート、肩からは可愛らしいバッグを下げている。それだけでなく、髪もいつものストレートヘアではなく、ハーフアップにまとめている。

「……なんか気合入ってるね、すごく似合ってる」

「えへへ、そう？」

素直にそう伝えたら、亜利沙はとろんと表情を蕩けさせる。頬がほんのりと薄桃色に染まっているのは、チークのせいだけだろうか。

……ちなみに。以前一緒に出かけたときに、「化粧はしない方が可愛い」と言ったら、めちゃくちゃ不満そうだった。なんでも、「女の子にとって化粧は努力の結晶なの。可愛く見られたいから時間を割いて大変なことをしてるのに、しない方がいいって言われたら傷ついちゃうよ」とのこと。なるほど、女心って難しい。

「さて、それじゃあ行こうか！　ミッション開始！」

「……ただショッピングモールに行くだけだけどな」

苦笑しつつ、俺とサランは、気合十分な亜利沙に続くのだった。

◇◇◇

ニャオンモール。

ダンジョン全盛となった現代では多くの商業施設で客足が遠のいたにもかかわらず、売り上げを伸ばしている、県内最大級の大型複合商業施設である。

ダンジョンの一般開放に伴うニーズの変化に合わせ、日用品や食料品売り場だけではなく、ダンジョン探索用品の販売や、ダンジョン攻略のシミュレーションができるＶＲのアーケードゲームを設置するなどして、シェアを拡大しているらしい。

「うっは、広いですね～。学園がダンジョンになった～とか騒いでいたようですが、ちゃんと現世にもダンジョンあるじゃないですかぁ」

所狭しと店舗が並んでいる壁際を背に、一階から八階まで階層をぶち抜いて吹き抜けになっている中央区画を眺めながら、サランが興奮気味に言う。

若干ジト目気味の目を見開いているあたり、相当刺激が強かったのだろう。

「いや、ここはダンジョンじゃないけども」

「え!?　マジですか。これがダンジョンじゃない……？　階層がたくさんあって、未知のもので溢れているのに」

目を白黒させるサラン。

確かに、ショッピングモールを初めて目にする人からすれば、そういう反応にもなるかもしれない。

ダンジョンで生まれた存在からすれば、この世界の方が未知で満たされているダンジョンなのだろう。

「ふむふむ、なになに？　〝みゅーじかるしょっぷ〟……え、このあからさまに先端からビームが出そうな〝とらんぺっと〟っていうの、音を出すものなんですか!?　モンスターを一撃で屠る系の武器じゃなく!?」

楽器屋のショーケースに鼻先を付け、コロコロと表情を変えながら中にある楽器の説明を読むサラン。ていうか、鼻息でガラスが曇ってるし。

「もうサランちゃん、もう少し離れて見よう？　他のお客さんがビックリしちゃう」

「おっと、こいつはぁ失敬」

苦笑いする亜利沙の指摘に対し、てへぺろ☆　っと舌を出して半歩だけ後ろに下がるサラン（なお、さっきとあまり状態は変わっていない）。

思えば、俺自身楽器屋の前で足を止めたこともなかったな……

そもそも、俺はこのショッピングモールに来ること自体初めてだ。ウィンドウショッピングの趣味もないし、ダンジョン攻略に関わるお店にも行くことがない。弓の手入れや矢の補充も、すべて吉田さんの店でするからな。

【弓使い】という役職はずっと不遇だったし、大型ショッピングモールといえど、弓矢すら置いていないのが普通なのだ。

そんなことを思っていた俺だったが……ふと、楽器屋から少し離れた店舗の前に人だかりを見つけて眉を顰める。

「なんだあれ……やけに繁盛してるな、あのお店」

一体なんのお店だ……？　そう思い、何気なく看板の店名を見て、背筋が凍り付いた。
高級ホテルのラウンジにある絨毯みたいなワインレッドの看板に、金の文字で〝【弓使い】専門店〟とある。
それだけなら、まあいいのだ。問題は、店の前に白髪でゴーグルをかけた三頭身人形が売られている……ように見えることだ。
……いやいやいやいや。
たぶん、おそらく、きっと気のせいだ。ここ最近、うっかり迷惑Sランクパーティーをボコしてしまったり、それがなぜか全国配信されていてバズってしまったり、その他諸々数え出したらキリがないくらいいろんなことがあったせいで、幻覚を見るくらいまで疲れているんだ。
「うわぁ～、さすが今一番ホットな話題に乗ってるお店なだけあって、賑わってるね」
頭を抱える俺の横で、亜利沙がちらちらと意味ありげな視線を俺に送りながら言う。
「……ねぇ、亜利沙」
「なに、お兄ちゃん」
「あのお店に、〝【弓使い】専門店〟って書いてある気がするんだけど、俺の気のせいだよね??」
「気のせいじゃないよ」
「っ……じゃあ、あそこに俺っぽい人形が売られてるのは……」
「現実だよ」
亜利沙の無慈悲な言葉に、俺は膝から崩れ落ちた。

前々から思っていたが、俺に肖像権というものは適用されないのだろうか？　あずかり知らぬところで俺の概念存在が一つ五百円で売られてるとか、どんな罰ゲーム？
俺の正体について、今はまだ同じ学園の人に知られたくらいで済んでいるが、学内掲示板に上がってしまったくらいなのだ。
あと数日もすればネットで拡散され、たちまち全国規模で身バレすること請け合いである。泣きたい。
「まあ、人気者の宿命だよね。どうしても非公式品は出てきちゃうものだよ……あ、ごめんなさい。私にも一つください」
「おいこら、さりげなく買おうとするな」
水が流れるように自然な動きでお店に向かおうとした亜利沙の首根っこを掴まえる。
「はぁ……なんでこんなことになったんだ」
「そりゃあ、うっかり迷惑Sランクパーティーをボコしてしまったり、それがなぜか全国配信されていてバズってしまったり、その他諸々やらかしたからじゃないの？」
「……」
ぐうの音も出なかった。仕方ない。後でダンジョン運営委員会の寺島支部長に言って対処してもらおう。
【弓使い】の専門店を見ながら、俺はそう心に決めるのだった。

◆◆◆

【弓使い】の専門店を離れてモール内を回った後、少しの間二階のトイレに寄って休憩を挟むことにした。

「……暇だな」

トイレの前で、翔と亜利沙の荷物番をしながら、サランはふとつぶやく。

モール内は、未知で満ちている。

早く探りたい好奇心と、翔たちが出るまで待たなければいけない歯がゆさとの板挟みで、体がどうにかなりそうだ。

「しかし、勝手にどこかへ行くわけにはいきませんからね……」

もし勝手に動いてはぐれたら、翔たちはきっと自分を心配するだろう。

自分は、ちゃんと分別がつく偉い子なのだ。だから――

（だからボクを――）

不意に、サランの心に暗い影が差した――そのときだった。

「きゃぁあああああああああッ！」

モール内に、耳を劈くような女性の声が響き渡った。

「助けて！　ひったくりよ！」

何事かと、顔を向けたサランの目の前を、女性用のバッグを抱えた男が過ぎ去っていく。後方から、必死に追いかける茶髪の女性が見えたが――あれでは、とても追いつけない。

――考えるより前に、体が動いていた。

弾かれたように駆け出したサランは、男を全速力で追う。ただし――スキルや魔法は使わない。

場を混乱させないために、息吹翔と約束したから。

（力を使わず、この場を収める！）

サランはドレスの裾を手で持ち、さらに加速する。

「っ！　ちっ！」

サランに気づいた男が、舌打ちして焦ったようにバッグを抱え直し、道行く客を突き飛ばして逃げていく。

相手が通行人に邪魔されているからか、徐々に距離が詰まり――

「くっそ！」

焦れた男が、九十度方向転換して下りのエスカレーターに乗った。

吹き抜けの方向に据えられた、一階へ下りるためのエスカレーターだ。下る速度も利用して下に一気に逃げようとして。

「しめた！」

それを好機と、サランはエスカレーターの横にある柵に飛び乗ると、そこから一気にダイブする。

木から木へと飛び移るモモンガのように、サランは柵からエスカレーターに乗った男に飛び掛か

り――そのまま、二人もみくちゃになって一階へと落ちた。
「へ、へへ……とった」
一階のタイル張りの床に転がったサランは、全身に傷を付けながらも、しかし女性のバッグをしっかりと胸に抱いていた。
「な、なんだなんだ！」
「急に男女がエスカレーターを転がり落ちてきたぞ⁉」
「！　喧嘩か？」
騒ぎを聞きつけた客が、わらわらと周りを囲み始める。
「いっ、て……テメェ、何しやがる！」
そんな中、逆上した男が、サランに掴みかかろうとして――
「サランッ！」
「サランちゃん！」
そのとき、二階の方から聞き慣れた声がした。騒ぎを聞きつけてやってきたらしい、翔と亜利沙だった。
それに続いて、バッグの持ち主もエスカレーターを駆け降りてくる。
「ちっ、クソッ！　人が増えてきやがった！」
男は、焦ったように野次馬を押し退けて、逃げていった。
「サラン！　大丈夫か！」

駆け寄ってきた翔が、自分のことのように苦しげな顔で呼びかけてくるのがおかしくて、サランは思わず笑ってしまった。
「へーきです。ついでに、お嬢さんのバッグも！」
「あ、ありがとうございます！　これ、死んだおばあちゃんの形見で……本当に、奪われなくてよかった……でも、そのせいでケガを」
渡したバッグを抱きしめながら、心配そうな顔で覗き込んでくる女性に、サランは「へーきへーき」と笑いかける。
それから、立ち上がって力こぶを作った。
「ボクはこの通り、ピンピンしてますよ～！」
「いや、でも……病院に行った方が」
「平気です、ご主人様」
なおも心配する翔に、サランは安心させるように微笑んで告げる。
それから、一歩近づいて彼にしか聞こえない声量で囁いた。
「ボクはビックリ人間ですから……こんなの、三十分もすれば綺麗さっぱり元通りです」

◇◇◇

その後、ひったくり犯の情報を店の警備員に伝え、迅速に男は逮捕された。

サランの傷も、宣言よりも早い二十分後には消えていたが――それでも、俺、息吹翔からすれば心配だった。

どれだけ傷が早く治ろうが、痛いことに変わりはないのだから。

彼女ならきっと、階段から落ちてケガするなんてことは本来あり得ない。だって、スキルで浮けるのだ。力だって人より強くできるだろうし、その気になれば無傷でひったくり犯を成敗できた。

だけど、そうはしなかった。彼女は――俺との約束を守ったのだ。

誰にも迷惑をかけないように、それでも困っている誰かを見捨てられないから、考えるよりも先に体が動いてしまう少女なのだと――俺は、そう思った。

それから、俺たちは当初の目的の場所に着いた。店名は〝マカロン・コーデ〟。

ポップなネーミングからわかるように、レディースの服を売っている店だ。

当然、俺には縁もゆかりもない。かろうじて縁があるとすれば、五年ほど前に別のショッピングモールで服屋を探していた際、スタッフらしき人に案内されたのがレディースの服屋だったことくらいだ。

……女子に間違えられるのも今ではだいぶ慣れてきたけど、当時は割とショックだったぞ？　それはともかく、見た目も中身も男の子の俺には、さすがに店内に踏み入る度胸はないわけで。

「じゃあ、俺は外で待ってるから。亜利沙がサランの服を見繕って……って、なにその渋い顔」

「別に？　こういうときに付いてくるのも男の甲斐性なのになぁ～って思っただけだけど、私はお兄ちゃん第一主義だから優しい表情で肯定するよ」

「めっちゃ苦虫を噛みつぶしたような顔で苦言呈してるけど？」

そんなに俺の選択って女の子からしたらアウトなんだろうか？　俺に恋人ができない理由もそこに詰まってたりする？

「そうですね。ボクとしても、ご主人様にぜひ服を選んでほしいところです。亜利沙さんだけでなく、男性からの意見も参考にしたいですからね」

「ぐっ……けどなぁ。流石に俺が入るのは場違いでしょ」

改めて、店内を見渡すと、女性ものの服が並んでいる。正面からは見えないが、このお店の規模だとランジェリーまでそろえているかもしれない。あと、入店してるのは全員女性。店員も全員女性だ。

……うん、だいぶハードル高いよ？

「はぁ～、仕方ないですね」

俺が渋っているのを見たサランは、大きなため息をつく。

落ち込んでいるサランを見ると、流石に申し訳ない気分になってくるな。

「ご主人様は、ボクのニュー衣装を〝帰ってからのお楽しみ〟にしたいんですね？」

「……はい？」

なに言ってんの？　この子。

思わず目を白黒させる俺の前で、「ええ、わかります。わかりますとも」と腕を組みながら勝手

に頷いて一人ミュージカルをし始めた。
「こんな人前じゃなく、誰も邪魔の入らない二人きりの部屋で、生まれ変わったボクを舐め回すように眺めたい、と。まったく、独占欲の強い方ですねぇ～」
「……」
「乙女の玉の肌はそうやすやすと殿方に見せるものではありませんが、ご主人様は特別です。むっつりなご主人様のために、奮発してあは～んな下着を購入してきますね？」
「……」
「ってあれ？　なんでさっきから無言なんですご主人様ぁ？」
俺の目を覗き込んでくるサランから目を逸らし、俺は亜利沙に告げた。
「俺も入る。コイツの監視で」
――俺が逐一監視していないと面倒なことになりかねない。
そう思い、店内に入ったまではよかったが、やはり普段行かないところだから緊張するな。しかも、だ。
「む？　こんなところにファスナーがあるんですね」
「こーら。じっとしてて。着せられないでしょ？」
「はーい」
今、カーテンを一枚隔てた試着室で女の子が着替えているのだからなおさらだ。
着替え方がわからないサランのために、亜利沙が付き添っているが……カーテンの向こうでひそひそゴソゴソされていると、なんか背徳感が募る。なぜだかはわからないが。
そんな風に思っていると、カーテンが勢いよく開いた。
「じゃーん。どうですか？　ご主人様ぁ」
溌剌とした表情を浮かべるサラン。
空色のゆったりとしたブラウスにクリーム色でロング丈のプリーツスカート姿だった。色こそ違えど、ぱっと見は亜利沙と同じようなファッションだ。
「可愛いと思う。今までのお姫様的な格好から打って変わって、落ち着いた雰囲気を感じられるというか……」
「ふへ、そうでしょう。なんなら、おニューなボクに欲情しちゃってもいいんですよ？」
「口を開かなければ、落ち着いた雰囲気でいいと思う。口を開かなければ」
大切なことなので二回言った。
「まあまあ、それもボクの魅力の一つですよ。人間は〝ギャップ萌え〟というやつがお好みなのでしょう？」
「君のその自己肯定感の高さはどこから来るの？」
ここまで打たれ強いと一周回って尊敬の念すら覚える。
と、亜利沙が顎に手を当ててじっとサランを見ていることに気づいた。
「どうしたの、亜利沙」
「うーん……とりあえずで私と同じ系統のファッションにしてみたけど、なんかしっくりこない」

「え？」
俺は改めてサランを見る。
……十分似合ってると思うけど。だが、言われてみれば確かに、亜利沙の方がこの系統のコーデにマッチする感じはする。
となると、サランには今のコーデ以上に似合うものがある、と考えられるわけだ。
「ご主人様は、どんな服を着てほしいですか？」
「そう言われてもな……正直、そういう方面のセンスはないし。本人が着やすいものがいいんじゃない？」
「なるほど。典型的な日和った意見ですね。まったく参考にならないです」
じゃあ最初から無理矢理連れてこないでほしかったな。料理にネーミング、洋服のセンスといろいろ壊滅的な俺に何を求めているんだ。
そんな風に思っていた俺だったが――
「あれ……あんたこんなところで何してんの？」
不意に、少し棘のある、しかし鈴を転がすような声が聞こえて、俺は振り返る。
そこには、見知った人物がいた。俺と同じくらいの背格好で、俺と同じ白髪の少女。だが、水晶のごとく透き通る白い肌はしっとりときめ細かく、やや吊り目がちの瞳は薄氷が張ったように美しい。
名前は塩江かや。俺と同じアマリリス上等学園の生徒だ。

その背格好と女子であるという点から、バズった【弓使い】と間違われ、先の学園ダンジョン化事変の折、暗躍していた生徒・君塚隼人の標的にされてしまった少女だ。
正直、俺のせいで要らぬ苦労をかけてしまったことをまだ悔やんでいるのだが……本人から気にするなと言われているので、顔には出さない。
「えと……いろいろとあって、妹と友人を連れて服を見に」
「へー」
塩江さんは、ちらっと亜利沙とサランを見る。
「ど、どうも。息吹翔の妹の亜利沙です」
「サランです～」
「どうも。あたしはコイツの同級生の塩江かや。よろしく」
ぺこりと頭を下げる亜利沙とサランに対し、塩江さんはあっさりとした調子で応じる。
それからジトッと俺の方に目を向けてきた――
「え、なに？」
「……あんた、そのうち後ろから刺されるわよ？」
え、なんで。怖い。
急に脅されて戦々恐々とする俺に、塩江さんは「乃花がいなくてよかったわね」と呆れたようにため息をつく。
「それより、塩江さんはどうしてここに？」

聞いてみて、質問の意味がないことに気づく。だって、女子が女性ものの服屋に来る理由なんて一つしかない。そう思ったが――

「あたし？　まあ買い物ってのもあるけど……ここ、最新のトレンドを押さえてるのよね。だから、服飾の勉強のために定期的にチェックしにきてんの」

意外な答えが返ってきて、俺は目を丸くした。

そういえば、彼女は可愛いもの……特に服が好きで、自分で作っていると聞いたことがある。

「すごいね」

「別に。好きだから続けてるだけ。……それに、あのバカのせいで最近ふっきれたってのもあるし」

指に髪を巻きつけながら、ふんっと鼻を鳴らす塩江さん。

あのバカ、というのは八代英次のことだろう。何かと仲がいいし。

「なるほどなるほど。塩江さんとやらは、そのバカのことがお好きなんですね？」

「は、はぁ!?　なんでそうなんのよ！」

訳知り顔でうんうん頷くサランに対し、塩江さんは声を荒らげる。

「あんなデリカシーのないヤツ、全然好きじゃないわよ！」

「まあ、そういうことにしておきましょうか」

耳まで赤くなって怒る（？）塩江さんに、どや顔で一歩引くサラン。

しかし、服のデザインを見にきたのなら、好都合かもしれない。

「あのさ、塩江さん。もしよければ、頼みたいことがあるんだけど」

「頼みたいこと？」

「うん。サランの服を決めあぐねてて、よかったら意見が欲しいなって」

「ああ、この子の……」

塩江さんは、改めてサランの格好をまじまじと見つめる。頭のてっぺんからつま先まで、まるで鑑定士のような目つきで。

対してサランは腰に手を当てて背中をのけ反らせる、いわゆるモデルポーズをしているのだが、意味ないと思うぞ。

ひとしきり隅々まで観察を終えた塩江さんは、うんと小さく頷いて。

「……確かに、妹と同じ格好だとこの子の場合イマイチ締まりが出ていないわね。任せて、あたしが最高のコーディネートをするから」

そう言って、ニヤリと不敵に笑った。

そんなこんなで、塩江さんのファッションコーナーが始まったわけだが。

「――そうね。あんたの場合、どっちかっていうと骨格ウェーブ気味だから、こういうオーバーサイズなトップスは逆効果なのよ。それにロング丈のスカートも。この場合、下半身はショート丈のスカートが妥当ね」

「ほ、ほうほう……骨格ウェーブ？」

「そ。骨格のタイプはナチュラル、ストレート、ウェーブと三種類あって、そのうち骨格ウェーブ

は上半身が細くて下半身の肉付きがいい、下に重心がきてるタイプを言うの」
「なるほど。つまりボクの太ももはムチムチと。なんだかえっちですね」
「……は？」
「ごめんなさいなんでもないです」
しゅんとして、借りてきた猫のように大人しくなるサランを尻目に、塩江さんはテキパキと説明をする。流石に、空気を読めないことにかけては他の追随を許さないサランでも、塩江さんの塩対応には弱いらしい。
「あんたは体こそ細いけど、胸が憎たらし……羨ましいくらい大きくてメリハリがあるから、胸元が窮屈に見えないようなデザインのショートカーディガンで重心を上げつつ、脂肪の塊……胸のせいで太って見えないようにするのがいいわね、不本意だけど」
「言葉の端々にそこはかとない憎悪を感じるんですが？」
「さあ、気のせいじゃない？　あとは色だけど、あんたのパーソナルカラーはどっちかと言うとブルベ冬だから、空色とかベージュみたいな淡い色は似合わないの。まあ、本人が好きなのを着ればいいだけなんだけど、そうね……あたしが選ぶなら濃いブルーで……」
お店にある服を完璧に把握しているのか、迷いない足取りで服を手に取る塩江さん。
それを遠巻きに眺める俺と亜利沙。
「なあ、亜利沙」
「なに、お兄ちゃん」

「俺ら、完全に蚊帳の外だな」
「そうだね」
まあ、これぱっかりは仕方がないが。基本冷たく突き放すような塩江さんが、やたら熱が入っているのか楽しそうだから、このまま見守り続けることにした。

「――ど、どうでしょうか」
「「ぉおおおお」」
塩江さんが練りに練ったコーデで再登場したサランを前に、俺たちは三人同時に声を上げた。
紺色のシックな印象を与えるショートカーディガンに、ボトムスはブラックと、さし色にくすんだイエローをちりばめたショート丈のプリーツスカート。なんというか、服を上下変えただけなのに……全然違う。
大人っぽいというか、すれ違ったら思わず二度見してしまいそうなくらいの色香が放たれている。
「すごく、似合ってるな……びっくりした」
「えへへ、そうでしょう。なにせ中身がボクですからね」
相変わらず軽口を叩きつつも、満更でもなさそうだ。とにかく、これで目的は達成だ。
「じゃあ、サランの服を買ってここから出よう」
一刻も早く。そう付け足そうとした俺は、塩江さんも含めて全員が俯いていることに気づいた。
「え、なに。みんなどうしたの？」

「甘いですねご主人様。ボクらはまだ、本当の目的を達成していないというのに……」
え？　本当の目的？　サランの服を買うのが本当の目的なんじゃないの？
「やっぱり、このまま終わらせる気はなかったのね。まあ、無理もないわ」
「はい。お兄ちゃんをここへ連れてこられたのは、またとないチャンスなんです……これを逃したら、次はいつになるか」
え？　本当になに？　何をしようとしてるの？
そう思い口を開こうとして、ぞくりと、得体の知れない悪寒を背筋に感じた。
――そういえば、だ。このお店に俺を連れ込む手段が、やけに強引だと引っかかっていたのだ。
しかも、俺に服を選んでほしいとか言っておいて、当の本人は塩江さんの選んだ服で満足している。
つまり。俺をこのお店に連れ込んだ理由は、別にある、ということなのではないか？
「――、待って。まさか」
その可能性に思い至った俺は、頬を引きつらせつつ一歩下がる。
そんな俺に対し、三人娘はにっこりと花開くような笑みを見せて――いつの間にか上下セットで選んでいたらしいレディースの服を、俺の目の前に突き出した。
「「お兄ちゃん（ご主人様）（翔）の着せ替えショー、レッツスタート！」」
「するわけないだろぉおおおおおおおお！」
俺の情けない叫び声が、あたりに響き渡った（なお、ギリギリ男としての尊厳は守り切ることに成功した）。

立ち読みサンプル
はここまで

◇◇◇

その後は塩江さんと別れ、再び三人で買い物を続けた。
サランの使う歯ブラシにコップ、タオルなどの日用品だ。やはり、同行人が目立つからだろうか。
男女問わずちらちらと熱い視線がこちらに向けられたりもした。
時折「ねえ、あの白髪のボーイッシュな子、可愛くね？」とか言いつつ、俺の方を見てくる人がいた気がするが……たぶん、きっと、絶対気のせいだ。
そうしているうちに、腹の虫が小さく鳴った。
「……そういえば、お腹空いたな」
「だね。うわ、もうこんな時間だよ」
亜利沙は、スマホの画面を見て目を丸くする。
時刻はいつの間にか十二時半を回っている。そろそろお昼ご飯にした方がよさそうだ。
「あ、見て。あっちにフードコートあるみたい」
「ちょうどいいな。行こうか」
「ふーどこーと……ってなんです？」
目をしばたたかせるサランに「行けばわかるよ」と告げて、俺たちはフードコートに向かった。
「お、おぉ～！　これは！」